

編集委員退任の挨拶に代えて

名古屋工業大学

野上 正行

I'm finished!

Masayuki Nogami

Nagoya Institute of Technology

読んで頂いているのは3月であるが、師走も押し迫った2003年の大晦日にこの原稿を書いている。今年も一年、走って過ごしてきた。この一年どれだけの仕事をしてきたのであろうか。ゆっくり考えることもなかった。2年間のNew Glass編集にかかわってきたお礼にコラム欄に執筆するようにいわれたのを機に、少し時間を割き、考えてみるのもよいであろうと、思いつくままに書きならべてみた。

大学での仕事

そもそも私にとっての仕事とは何であったのであろうか。教育と研究に成果をあげねばいけないことは承知している。大学を運営していく上での所謂、管理職に就いているわけではない。それでも、研究成果にかかわる情報発信のための作業と教育活動にどれだけの時間を割いているのであろうか。ほぼ毎日のように計画・申請書きが入ってくる。3ヶ月前に今年度の実施計画書を書いたばかりなのに、成果報告書を出すような通知が来ている。たとえば、1ヶ月後に来年度の計画・予算を出すような指示がく

る。どうなっているのやら。指示される方も分かっているはずなのに。こちら、長くやっているとその辺のコツを覚え、パソコンのコピー・ペースト機能の有り難みが身にしみる。

研究費は必要であり、研究室が倒産しないように工面しなければいけないことも承知している。ただ、仕事を与えて頂いたら、もう少しの自由と時間と信用をいただければと思う。

学内事務処理が入ってくる。締め切り時間が言われているので最優先しなければならない。慣例文をみながら書いていけば良いところもある。まず目が埋まり、体裁が整ってくると仕事ができたと気分になれることもある。誰かが言っていた。「会議に明け暮れていると、その内、会議のない日は寂しくなる」と。

ということでは本職であるはずの論文書きが、どんどん後回しになっていく。しかもこれには締め切り日はない。危ない限りである。危ないと思わなくなれば、終わりがなとへんに納得して、今年も暮れゆく。

産官学連携

大学の知的財産の活用が言われ、ベンチャー企業の育成、共同研究の勧めが産・官・学界、問わず言われている。大いに結構である。その

ための支援も増大しているし、科学技術関連予算も、この時代にして右肩上がりである。大学人として有り難いことである。ここでは、我々の人的財産を大いに活かして飛躍したい。工学部には学部卒研究生から院生、博士研究員と多くの人材を抱えている。企画書作りになれた老輩に比べ、ものづくりに興味津々なところがよい。研究探求心が旺盛で、昼夜変わらず、研究に没頭する若さを備えている（パソコンに頼りがちな面をもっているが）。開発研究には、あの手この手攻めなければならない人海戦術を必要とする面もある。ここで、若い力が大いに発揮される。知的活動から少し遠ざかっている私など、時々びっくりさせられる。

最近では文科省以外の省庁が掌握し、開発に関する研究にも、大学人が中心的な役割を担い、多くの成果を挙げているのに、このような背景がある。一方、公的研究機関では、分析・評価関連の研究やコーディネート様のテーマが増えている。少し前と逆転している。良し悪しは別にして、考えさせられることである。我々も、教育という視点を外さずに、この人的資産を大事にしなければならない。教育についての対価を求めながら、研究成果について協同者として成果の共有化を図らねばならないし、できれば入り口から責任の取れるようなものにしていければと思っている。大学がそれらしくあると言われるためにも、考える時期にきている。

多 様 性

愛知県は工業製品出荷額が年 30 兆円を超え、日本全体の 1 割をかるく超えている。勿論日本一である。その愛知県には、工学部をもった大学が国立だけでも 3 大学ある。その中で、私のいる大学は工学部のみで、学生数だけからすれば、おそらく日本一の部類にはいる。ものづくり産業の発展に、研究・人材の輩出を通して貢献してきた大学の寄与が大きかった。時代が移り、大学の有り様を考え直さなければと言

われている。しかし、世事がどう変化していこうとも、これだけの人口をもつ国として、ものづくりを中心にした産業振興に軸を置かざるを得ないし、「工」のもつ重要性に変わりはないと思う。しかし、問われるのは存置理由である。昔からあったでは、すまないことは十分承知しなければならない。時代の変動をつかみ、ニーズを先導するシーズでもって存置する意義を表明していかなければならない。我々の大学には何があるのかな。

折しも、4 月から、国立大学の法人化がスタートする。予定通りかどうかは知らないが、当初の期待からかなり違った方向になっているように感じられる。議論は不要と言わないが、議論をすればするほど、特徴がなくなり、横並び的なものになってはいないだろうか。中央思考の強い国民性からは無理を言えないが、当初の意気込みが、少しずつ消えてしまっているように感じる。

大学の中でも、工学に限れば、もっと個性を大事にしてもよいのではないだろうか。個性の一つに地域性を揚げたい。医学や数学・理科などの基礎科学は、どこにいても差がなく、最先端の知識やサービスを受けたいものであるが、工学は少し様子がちがう。時代とともに変遷してきているものの、地域と結びついた部分を多くもっている。地域といえば一段下のような印象を持ちがちであるが、そうではない。地域社会に貢献できる工学が無数にある。だから国際学会に出席しなくてもよい、二番煎じの研究になってしまうと言っているのではない。むしろ逆で、地域で認めてもらえるような研究成果は世界に通じるのである。今の時代、世界に通じなければ地域にも通じないのである。

また、優れたオンリーワンを作ることも必要となってくる。オンリーワンであるから、一人か、ごく一握りが脚光を浴びることになる。この時も、集団として逆の意識が作用し出すように、ヘンな平等主義を唱えていたりする。オンリーワンをさらに伸ばそうとするベクトルが働

けば、やがて全体の評価が高まり、全員が実力以上の評判を得るようになるのに。大学の法人化を機会に、一律平等主義をはずして、うちにどのようなオンリーワンがあるのか、それを軸にして、なにができるかを考えれば、割と簡単に方向がみえてくる。個性があり、少しは評価

してもらえる大学になるのではないだろうか。そのような舵取りが必要である。その際に、オンリーワンを為しとげ、成功体験のある人をリーダーにして、方向付けをしてもらうことが、とりわけ重要であるような気がする。瑠璃も玻璃も照らせば解る。